

## 甘さの地域構造を探る

### —砂糖をめぐるグローバリゼーションとローカリゼーション—

矢ヶ崎典隆

日本大学文理学部

21世紀に地理学はどのような方向に進むべきなのであろうか。本稿は、地理学の伝統的な視角、すなわち自然と人間、起源と伝播、地域と景観、時間と変化に、グローバリゼーション、ローカリゼーション、サステナビリティの視角を組み込むことにより、ローカルからグローバルまで、地域と世界を読み解くための考察の枠組みを提示することを目的とする。具体的な事例として砂糖について検討した。世界の砂糖はサトウキビ糖回路とテンサイ糖回路により供給され、これらの回路はそれぞれサトウキビ糖地域とテンサイ糖地域によって構成される。製糖地域を構成する四つの要素、すなわち資本、製糖工場、原料調達、労働力に着目することにより、製糖の地域的特色、製糖地域間の交流と競合関係、グローバルな動向、製糖の持続性について、地理学からアプローチすることができる。このような甘さの地域構造を探索することは、地理学にとって魅力的な研究フロンティアである。

**キーワード：**地理学、グローバリゼーション、ローカリゼーション、サステナビリティ、砂糖、サトウキビ、テンサイ

#### I はじめに

地理学は地域を記述し地域現象を説明する学問分野であるというのは、古今東西の地理学者が共有できる認識であろう。しかし、地理学が制度化された20世紀初頭から1世紀が経過し、この間に世界は著しい変貌を遂げるとともに、地理学の視点・方法・課題、そして社会における地理学の役割は変化してきた。科学技術の発達とともにミクロスケールの分析や説明が評価された20世紀は、地域に関する総合科学としての地理学にとっては不遇の時代であった。それでは、21世紀に地理学はどのような役割を果たし、どのような貢献をすることができるのだろうか。

地理学には四つの伝統的な視角があると筆者は考えている(矢ヶ崎, 2015)。それらは、人間と環境、起源と伝播、地域と景観、時間と変化である。地理学は自然と人間との関係を解明する学問であると、昔から認識されてきた。人間は自然の影響を受けると同時に、自然を認識し、利用し、

改変する動物である。自然と人間との関係は、時代が変わっても、地理学にとって究極の視角である。二つ目の視角は起源と伝播である。地表面は連続しており、人、物、情報、文化、技術などが移動して、地域間に接触と交流が発生する。さまざまな事象の起源と伝播をたどり、移動が引き起こす接触と交流やその影響を考えることにより、地域と世界をダイナミックに捉えることができる。三つ目は地域と景観であり、これらはまさに地理学のキーワードである。地理学が対象とするのは地域であり、地域のしくみ、すなわち地域構造と、それが表出した景観に着目する。設定する地域スケールによって、地域構造と景観のとらえ方は異なる。四つ目の視角は時間と変化である。地域は常に変化しており、過去の地域を復元することにより、また、地域の変化を把握することにより、地域変化のメカニズムを理解することができる。

本稿では、このような地理学の視角に基づいて、ローカルからグローバルまで、地域に展開す